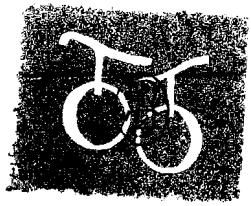
田宮虎彦

明治44年8月生れ。主として神戸で成人した。昭和11年東大国文科を卒業し，新聞記者，官庁嘱託，教員等転転と職をかえ，戦後，作家生活に入った。「霧の中」「足摺岬」「たずねびと」「愛のかたみ」等の著作がある。



愛するということ

昭和32年7月　第9刷発行©

著　者　田宮虎彦

発行者　黒川義道

印刷所　大同印刷株式会社

発行所　東都書房

東京都文京区音羽町3の19講談社ビル
電話大塚(94)3101・3111・3121（代表）
振替東京　72732

価　280円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。
（横田製本）

愛するということ

田宮虎彦

東都書房

目次

女性の位置　二
夫と妻との間　三
女、その不幸　三
ある小心さ　三
生れた時の幸福は　六
運命というもの　四
社会の中に生きて　五
家をせおった蝸牛　九
女の不幸は男のせいであるか　六
親と子との間　七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

*
父子関係　八五
*
裏返しの人生　一〇一
女の人が美しく見える時　一〇九
女子の学問　一一五
悪妻について思うこと　一一九
鷗外と妻と子供たち　一二七
悪妻　一二七
鷗外の妻　一二九
鷗外の子供たち　一三一

日記と人生　一三五
文学する心　一四一
志賀直哉氏の作品と私　一四七
「こゝろ」と私　一五一
「カストロの尼」のこと　一五三
読む画帖　一五九
わたしの古典「方丈記」　一六一
*
上林さんのこと　一六五
丸山さんと私　一七一
*
旅に出たいと思う時　一八三

まだ見ぬ足摺岬　一八五
食べものの記憶　一八九
女房の守備範囲　一九三
たけきもののふの　一九五
死と生の間　一九七
世界の出来事と……　二〇三
いっぱいのお茶と世界　二〇五
妻の死後　二〇九
*
死の扉　二一三
*
母の愛情　二一九

いまの子・むかしの子　三二
子供の日によせて　三五
＊
山麓逍遙　三九
秋・富士見高原　三五
＊
あとがき　一四五

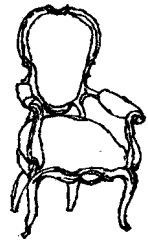
題簽　田宮虎彦

装釘
カット　岩佐　清

愛するということ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb

女性の位置



つい数日前、読みすてた新聞記事に、女性はそのホルモンの作用から精神的な仕事に適しない……と書いてあったと思い、それをもう一度くわしくよみかえしてみたいと思ったのだが、その新聞がどうしても見つからない。たしかそう書いてあった。重大なことをかるく書いてあるな、と、その時、思った。医学的にそういうデータが出るのだろうか。出るとしても、医学が解明出来る範囲は、現在のところ、まだ限られた小部分にしかすぎないのだから、結論というより、それは大胆な仮説というにすぎまいと思う。それはそれとして、男性と女性との間に本質的に優劣があるかないかという疑問は、女性をかなり苦しめているらしい。昨年「婦人公論」からそのような意味のアンケートを受けて、私は自分の考えを書いたことがある。

その「婦人公論」の質問は、劇作家の田中澄江さんやジャーナリストの戸塚文子さんたち五人の著名な女の人たちがあつまって、女性からの男性への質問をいくつかつくったうちの、一つであった。(ついでに書きそえると、その幾つかの質問に対して、男性の側で答を書くというのが雑

誌のこころみであった。）それで、今、その時の質問と、それに対して私が書いた答とをつぎに書きうつしてみる。これには「男の優越感」という小見出しがついている

問　男の方は、ほとんど絶対に、女の人より優れていると思っていらっしゃるのでしょうか。「男のくせに」という言葉は、当然何かできるはずだ、という意味が多いし「女のくせに」というのは、何かができるはずがない、という意味が多いところをみると、どうやら、男の能力と女のそれとは、比較にならないと思っていらっしゃるのでしょうか。

でも、それは、あるいは、長い間の、男中心の社会の歴史がつくった習慣ではないでしょうか。どうか、心をむなしくして、お答え下さい。男が女に対して、とてもこれはかなわない、とお思いのことが絶対ないでしょうか。それから、これもお答え下さい。男が、女に対して、本当にほこらしい、とお思いになることも。ながい間の、男対女の見栄や、意地をちょっとの間だけなしにしてお教え下さい。今度生れてくる時、もしどちらでも自由にえらべることがあれば、その時の参考にしたいのですから。

答　男と女との間に、現在あるがままの状態においては、能力差はやはり残念ながらあると思います。しかし、これは日本中のすべての男、すべての女を平均して考えての結果で、個人個人を考える時、すぐれた女の人はいくらでもいます。お気づきのことでしょうが、愚かな男は実に数多くいます。ですから愚かな女の数多いことも、みとめていただかねばなりません。愚かな度合がちょっとひどいというだけのことです。そして、その理由は、おっしゃるとおり長い間の男中

心の社会の歴史がつくったものでないかと、私は考えています。

十一年前の敗戦の日まで、わが国では女の人の進学する大学はなかった。この一つの例が示しているように、国家も国民も女には知的訓練は不必要と考えて、女は健康でよく働き多く子供をうめばよいとしていたのです。敗戦後、女性は解放されたはずなのですが、不思議なことには、今もなお女の人の多くが敗戦前のそのような男の奴隷としての女の生き方を是認しつづけているように私には思われます。

日本の社会は、敗戦をさかいとして近代へはいったのですが、それは与えられた近代で、それを無血革命などという馬鹿な言葉で謳歌していたため、十年たつと秩序は逆もどりの形勢です。女の人は昔ながらの生き方からぬけきれない。従って何時までたっても男と対等する能力を持ち得ない状態におかれているのです。

私はもともと男も女も、能力は同じであるべきだと信じています。女の人のすべてが妙な劣等感などかなぐりすてて、知的訓練を回避しないならば、いずれ近い将来に、男女の能力は平均して、こんな質問は必要でなくなると思います。

男が女にかなわないと思うのは、やさしさという点です。男が女にほこってよいことは、無駄なお喋りを余りしないことです。町角や店先で一時間も二時間も立話している女の人の姿がなくなるまで、次に生れて来る時は男に生れて来る方が安全であるように思います。少くとも私は、男に生れて来たい。

この私の答は、今も、私の心の中でかわっていない。実は、その答を書く時、田中さんたちが真面目にこんなことを質問しているのかと、ちょっと不思議に思った。五人のすぐれた女の人たちがあつまって、こんな質問をするわけはないので、男性をからかったのかもしれない。しかし、女の人の心のどこかに、(たとえこの五人の人たちの心の中にではなくても)男のもっている優越感というものに対するしこりがあって、それが、半分からかいのようなかたちで表に出たとも考えられたのだ。

男の優越感、逆にいえば女性の劣等感ということになるが、いつかよんだ片岡美智さんの「人間」という本にその劣等感に苦しんでいる片岡さん自身が書かれていて、私はひどくおどろいたことがある。片岡さんの文章には、もちろん誇張があるに違いないが、女の人がいつもこのように考えているのかと思って、私も少し誇張して書けば、黯然としたものであった。

しかし、よく考えてみると、男と女との性別が、肉体においてそれがはっきり区別されているように、精神においても区別されているであろうか。もちろん区別はある。しかし複雑な心理の深部では、男性的要素と女性的要素とがいりみだれているということは、少し人間観察の眼をこらせば、誰にもたやすくわかることだ。

たとえば嫉妬という心理だが、前に書いた婦人公論の質問の中にも、その心理が男の方にかえってつよいのではないかという一問があって、男性の職場の中の、同僚間の嫉妬のことが例としてあげられてあった。嫉妬深い妻もあるが、嫉妬深い夫もある。だから、嫉妬という心理は、男にも女にも共通な、人間の心理なのだ。また饒舌ということも、男にも女にも共通な、人間の行

為動作の一種なのだ。ただ、嫉妬の場合も、饒舌の場合も、女性により多くあらわれているという現実は、どうしても否定出来ず、それ故にそれらが女性特有のものだという考え方が、社会通念を支配しているのである。

愛しあうということも、男の立場からと女の立場からとでは、あらわれ方がちがう。男の立場からは征服するというかたちで、女の立場からは受けいれ融けあうというかたちで、それはあらわれるといわれる。征服するという言葉はいやな言葉だが、いつかよんだ心理の解説書に、たしかこの言葉がつかわれていた。能動的な愛し方といった方がよいだろう。そうすれば女の愛し方は受動的な愛し方ということになる。しかし、現実に生きている一人一人の男性や女性について考えてみると、この相反する二つの愛し方が、微妙にいりまじっていることがわかるはずだ。たとえ愛されたいと願って女が愛しはじめた場合でも、その愛されたいと願う心理に、能動的な愛し方が全然ないとはいえないだろう。また愛しはじめた男が、よしその最初には能動的な愛し方で愛しはじめたにちがいはないにしても、愛しあうという相互にはたらきあう愛情がつづいたのち、愛する人と合一したいという願いが、つまり愛する人からも愛されたいという受動的な愛の心が全然生じないということは決してあり得ないと思う。全然生じない場合は愛しあうということは成りたたない。

私たちは、母の胎内で、男に生れるか、女に生れるかがきまるのだが、それが何時、どうしてきまるのかは、まだ神秘のことに属するようである。いいかえると何かの偶然がそれを決定するともいえよう。もしそうなら、その偶然のこちら側とむこう側とのさかいめは、ひとつの点にす

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb